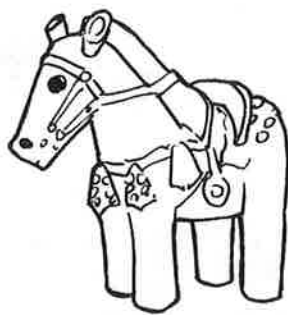


神ノ井と日向泊とトンド焼



中 林 幸 夫

(会員・佐伯市長島町)

文化会館で催しものがある度に、佐伯が生んだ画伯・菅一郎先生が描いた「神ノ井」の緞帳を見ていると、佐伯の古代史へのロマンにかきたてられる。

昔々、日本の国を興した初代天皇、即ち、神武天皇が東征の折、佐伯湾の大入島の日向泊に立ち寄り、皇船の飲料水を求めて、日向泊の浜に弓の矢を地中深く突き立てて「水よ出でよ」と祈った処、真水が湧き出たのが「神

ノ井」であり、神武天皇が寄港したことから「日向泊」と呼ばれるようになったとのことである。

「神ノ井」は今も海岸にありながら、口にしても真水であることは疑いなく、地名も伝説由来のまま現在も日向泊と呼ばれ存在しており、このことのみを信じると、この物語は日本の歴史上の重大なことである。

しかし、この伝説を考えると、少なからず矛盾がある。それは、戦後の歴史考では、年代などから神武天皇の実在性が問われているからである。

神武天皇が第一代天皇として即位したのは西暦前六六〇年であり、戦前の教育では紀元節として日本の国家の歴史の古さを強調し、天皇は万世一系の神の血を引く方であると崇められた。小学校の歴史の時間に、第一代天皇から第一二四代の昭和天皇までの名前を暗唱できなくてはならぬと思いをした人も多し。神国日本を強調するため、昭和一六年（西暦一九四一）が紀元二六〇〇年にあたり、建国二六〇〇年として大々的な祝賀行事が行われた。

神武天皇のことは、西暦六八〇年から七二〇年代にかけて、天武天皇の命により編纂された『古事記』、『日本

書紀』の中に書かれており、要約すると、

悠久の昔、天照大神（アマテラスオオミカミ）の孫にあたる邇々芸命（ニニギノミコト）は大神の命を受けて、高天原から筑紫日向の高千穂の峯に天降だった邇々芸命には

火照命「ホデリノミコト（海幸彦）」

火遠理命「ホオリノミコト（山幸彦）」

の二人の子があり、火遠理命は海人の娘、豊玉毘売トヨタマヒメと結婚。日子波限建鷓鴣草萱不合命（ヒコナギサタケウガヤフキアエズノミコト）を設けた。

この御子は高千穂に坐して、おばの王依毘売（タマヨリヒメ）と結婚。五瀬命（イツセノミコト）・稲氷命（イナヒノミコト）・御毛沼命（ミケヌノミコト）・若御毛沼命（ワカウケヌノミコト）の四人の子供を設けた。この末弟の若御毛沼命は、別名神倭伊波礼毘古命（カムヤマトイハレビコノミコト）といい、即位して第一代天皇神武天皇となった。

神武天皇は、兄五瀬命と一緒に高千穂の峯から下って、日向を出発、筑紫に向かった。その経路は、

日向―宇沙（ウサ）―筑紫国の岡田宮（一年滞在）

―阿岐国の多祀理宮（タケリ）七年滞在―吉備の高嶋宮（八年滞在）を経て東に航海し、紀州・熊野から上陸、大和国に入ったと『古事記』に記載されている程度で、途中の航海の状況等詳細は書かれていない。そのため伝説等をまとめて書かれたものを見ると、この日向から宇沙に行く途中、大入島の日向泊に立ち寄ったことが神の井伝説として書かれている。

そこで、伝説等を基にして書かれたものを見ると、日向の出発地は美々津といわれ、出発日は、紀元前七年の八月一日といわれている。

美々津には「我国海軍発祥の地」の石碑が建っているが、付近を眺めても、昔々、この地で遠洋航海に耐える大型船を建造しただろうと思える感じはしない。

石碑の上流一キロに「匠のコラ」という所があり、ここが皇船の建造場所ではないかと伝えられているが、縄文・弥生より前の紀元前に大型船を建造する技術があったとは想像できない。

それに、天皇等が乗船した皇船は、古墳出土の埴輪等から推測すると櫂で漕ぐ船型となり、最大搭載人員も三十乃至四十人程度と思われる。

軍団や民族的な大移動を考えると船は数隻から数十隻が必要であり、海を生活の場としていかなかった高千穂の山間部族には建造は無理である。

日向の岩脇村には、出発に際して天皇が風の方向を知るために紙鳶を上げた伝えがあり、旧暦八月にタコ上げの風習が残っているとのことであるが、紀元前には紙はまだ生産されていない。

天皇の船は、旧暦八月一日、美々津を出発して、細島に寄り、次に延岡市の土々呂の櫛津に寄り、その後、荒天のため蒲江町の入津湾に入り畑野浦に立ち寄り、食糧・水等の供給を受けたという。その伝説地に伊勢本神社があり、神社の祭礼は十一月五日に行われ、天皇にふるまったトブロク祭の風習が残っているとのことである。畑野浦を出港した皇船は、その後、佐伯湾に入り、大入島の日向泊に立ち寄ったとされており、神の井の水を汲んで補給したと言い伝えられている。

日向泊には、皇船を繋いだといわれる大きな岩があるが、荒天のため佐伯湾に入港した船なら、もっと風浪の当らない鶴見半島か上浦あたりの浦に行くのが常識的であろう。まして、美々津港の旧暦八月一日から以後は、

台風の季節であって海が荒れるのが常である。何故この悪い季節を選んで航海したかも疑問である。

このように矛盾を挙げていくと神武天皇の東征の事実はなかったかもしれない。しかし、「日向泊」も「神の井」も、浦人が皇船を見送ったとき焚いた火明行事が「トンド焼」として現在も残っていること等から全てを否定することは出来ない。

それでは、何があつたかということになり、これを解明しようとするれば、佐伯には古代のロマンがあるように思える。

戦前、日本の教育は、天皇制を神格化し、その崇拜を国民に押しつけたため、歴史の真実追求が行われず、偏重した考えを学ばせて、矛盾を考えさせなかった。最近の歴史書では、『古事記』『筑後風土記』等から、筑紫の支配者であった磐井の君を滅亡させて、日本全土を支配下に入れた第二十六代継体天皇（西暦六世紀頃）頃に日本の国家統一と天皇制が確立されたのではないかと言われている。

また、『日本書紀』・『豊後風土記』に記録のある九州の熊襲征伐をした第十二代景行天皇や、第十五代応神

天皇、第二十一代雄略天皇の説もある。

そこで、日向泊のことにかえるが、「日向泊」の地名が残されたことから、「日向」の呼称で呼ばれた船が来航したことは事実と考えられる。

「日向」の国名の記録は、七世紀に書かれた『古事記』・『日本書紀』にあるが、三世紀に書かれた中国の書『魏志倭人伝』にヤマト等国等三十国の名があるが、その中にないことから、ヒミコの存在した西暦二百三十九年以後に「日向」と呼ばれる国が出来たことは想像できる。

このようなことを考えると、「日向泊」の起源は三乃至六世紀頃と推測される。

それから、トンド焼きのことであるが、「トンド」には朝鮮語の^{トンド}동소(同道、連れ立っていく)と考えられる可能性があり、このことも考慮に入れると、日向泊に立ち寄ったのは、朝鮮半島から下って来た船のようにも思われる。外国から渡って来た船であれば、鶴見半島・上浦を避けて安全性から人の少ない大入島日向泊を選んで避泊したとも思える。日向泊は、現在でも四十戸の集落であるから、昔は数戸の漁村であったと思われる。

以前、本誌第一五三号で、宮崎県南郷村の御門(ミカ

ド)神社に由来するサラバが、朝鮮語ではないかと書いたことなどを併せ考えると、「トンド」も朝鮮語であってもおかしくないし、理解できる。

御門神社の伝説は、物的証拠の銅鏡三十三面が存在することから、百済の王が亡命して来たことは真実であろう。この王の来船は、約千三百年前の六世紀から七世紀にかけてのことから考えると、この王の乗った船も、多分佐伯湾に錨泊したことだろう。

朝鮮半島では六乃至七世紀以前は戦乱が続いており、幾多の王が、日本に救いを求めて来船して来ている史実がある。朝鮮からの来航船が豊後水道を南下したと考えられると、古代船の大きさも、時期の旧暦八月もうなづける。

紀元前、高千穂の山岳部族が宇佐を目指すなら、海路の危険を避けて、陸向するはずである。

また、『古事記』・『日本書紀』等の神話は、朝鮮の神話、歴史の影響を受けていると言われており、日本は、「日出ずる国」との意味があるが、朝鮮には「日を迎える国」との考えもあると聞いている。そうすれば「日向」は朝鮮民族の発想かも知れない。戦前の歴史教育の偏向した時代に書かれた書物や伝説は再考する余地がありそ

うに思える。

菅一郎先生は、五から六世紀にかけての時代を想像して筆を取られたものと思える。正しい歴史を分析していかたかもしれない。「神話と樺の島」にはロマンがあるが吉野ケ里のように史実に結び付く要素も必要かもしれない。

豊ノ浦

豊後水道 その昔
神話神ノ井 清水湧く
国を興せし 皇軍（スメラギ）の
船も漕ぎ来て 水を汲む
日向泊の みやしるに
島の娘は 何祈る
恋の椿の咲くことを

